

パンデミック中・後における フランスのマンガ市場の動向

杉本バウエンス・ジェシカ*

Trends in The French BD Market During and After the Pandemic

Jessica BAUWENS-SUGIMOTO*

During the pandemic, many around the world, as well as in mainland Europe were confined to their homes and immediate environment for prolonged periods of time. This period of confinement took longer than expected, and while waiting for the vaccine and the loosening of restrictions, people looked for something to take their mind off things and their consumer patterns changed. While the whole world was trying to overcome the crisis caused by the new Coronavirus and there wasn't much the general population could do, one way to overcome this crisis was entertainment. Trying to avoid direct contact with other people, during this period online commerce increased exponentially for everyday items and household goods. The same is true for film, games, and books, of which the sales also increased. In France, French translations of Japanese manga, especially popular among young readers, also saw an increase in sales to the extent that they are seen as an ever growing threat to the local comics (bande dessinée, BD for short) market. This paper, introducing several representative examples, discusses how this change in consumer pattern played out in the French BD market.

初めに：パンデミックと BD

フランスを含む多くの国ではパンデミック中、他人との接触を塞ぐために、生活用品の販売においてオンラインショップを利用する人が急増し、売り上げの向上に繋がった (Lorey, Mughal, Javed, 2022; Nicolai, Grange, 2020)。外出ができなくなったことによる食品の売り上げの増加に加え、多くの人が感染リスクを恐れていたため、掃除用品の売り上げ向上が目立つ。生活雑貨と同時に、自宅で楽しめる娯楽の需要、特にデジタル映像、マンガを含む書籍（デジタルと印刷物）、ゲームの売り上げも増えていた。自粛する人は通学・通勤時間を節約し、余った時間には新型インフルエンザ（コロナウイルス）に対する不安を和らげるため、エンターテインメントに頼り、現実逃避をする気持ちは誰もが理解できるだろう。

ここではまず、本稿の「マンガ」というメディアに関する言葉遣いについて説明したい。フランス語圏、とりわけフランスとベルギーは「マンガ王国」として、3大マンガ文化の一つを担っている。フランス語圏本来のマンガはバンド・デシネ (Franco-Belgian bande dessinée, 以下 BD)、英語

* 龍谷大学国際学部准教授

圏、とりわけアメリカ合衆国とイギリスのマンガはコミックス (comics)、そして日本のマンガは漫画と称する。フランスでは、日本の漫画について語ると、manga という言葉も使われるが、「日本の BD」とも言われている。また、英語圏の学術言説において、フランス語圏の BD は「フランスのコミックス」と称されることもある。一貫性を保つため、本稿においては日本のマンガを漫画、フランス語圏のマンガを BD、そして英語圏のマンガをコミックスと称する。「マンガ」という言葉は、国際的で、包括的に扱われる。フランス語に訳された日本の漫画は商品として BD とマーケットをとともにするが、フランス語圏で販売される日本の漫画は、基本的に正式な仏訳であるという理解で執筆を進めている。

本稿では、出版業界やメディア報道で観察できたフランスでの BD 業界の動向の大きな流れをまとめていく。重要で面白い作品があまりにも多いため、ごく一部しか紹介できないが、各流れを代表する作品を選んでいく。第 1 部では、フランス、もしくはベルギーの一部、スイスの一部を含むヨーロッパのフランス語圏における日本漫画の人気について触れたい。フランスはパンデミック前から日本漫画の第 2 市場であり（日本はいまだに第 1 市場だが、将来の変容は可能性としてある）、パンデミック中メディアで頻繁に言及されるほど日本漫画の人气が以前に比べて増えたことの要因について解明していく。第 2 部では、日本漫画の人气に脅威を感じるフランスの BD 業界が絶えず新しいかつ挑戦的な BD 作品を発表していて、そのテーマ性の中から目立つ傾向を探索していく。この数年間注目されている作品には、おそらくフランスでしか描けない（アーティストが必ずしもフランス人とは限らない）、現地の資料にアクセスがないと描きにくい BD がある。そのテーマは革命や戦争という歴史的と同時にタイムリーなトピックであって、その多くは社会批評を含めた教育効果もあると思われる。そして第 3 部では、BD マーケットの守備的な作戦、確実に売れる古典的な作品の続編、特別版の出版について考えていく。

1. 若者の「文化パスポート」と日本漫画

フランスでは、日本漫画の人气は社会現象といえ（杉本、2023）、フランス語圏本来のマンガ媒体における BD のマーケットシェアは日本漫画の勢いによって脅かされている。若者の漫画に対する情熱は、強まる一方である。パンデミック中、そしてその直後、メディアに注目されたのはフランス政府が若者（15 歳から 20 歳まで、フランス国籍を有するもの）に配布した「文化パス」(Pass culture) であった。本制度は今でも継続し、新しく 15 歳になった若者は申請できる。文化パスは、あらゆる「文化」のために使える 300 ユーロである（同上）。文化パスは文化のためなら、概ね何にでも使用することが可能である。ウェブサイトの証言によると、ピアノを買う 10 代の若者もいれば、バレエのレッスンなどに充てる若者もいる。しかし、ほとんどの若者がエンターテインメントとなる文化、とりわけ大衆文化にお金を使っている。

文化パスで日本漫画を購入する若者があまりにも多く、文化パスはメディアに「漫画パス」と呼ばれるようになった（杉本、2023: 93）。2023 年の報告書 (Gfk) には、2022 年のフランスの市場を分析した結果、売り上げ順で見ると一般文学はいまだに 1 位（全体の 25.2%）であるが、フランスの出版市場において、日本漫画は 2 位（24.8%）である。その差もわずか 0.4% で、今後逆転する可能性も考えられる。全体の売り上げの 24.8% ということは、フランスで売られる書籍の 4 冊に 1 冊は日本漫画であることを意味する。報告書において、日本漫画のマーケットでの 1 位は歴史

的な出来事とされる。

日本漫画の仏訳の売り上げは日本で大衆文化論の科目を担当し、マンガ研究を指導するものとしては嬉しい限りである。その反面、パンデミック中に漫画とアニメの海賊版を違法に掲載するウェブサイトへのアクセス数も著しく増加していた。その理由として、利用者は必ずしも悪質ではなく、パンデミック中リストラされたもしくは他の理由で収入が減った人が多いという事実もある。また、読者の経済的困難の可能性に加え、好きな作品の正式な翻訳版がまだ発売されていないなど、複数で複雑な要因が挙げられる。ゲーム、動画、ソフトの海賊版サイトの全てにアクセスが上昇しているが、マンガを含む出版物の場合、アクセス件数はパンデミック前と比較すると6割増強している (Leboucher, 2022)。漫画業界の関係者から見て、海賊版サイトは大変問題であろうが、漫画研究者としては、曖昧な領域である。海賊版サイトで漫画と出会うファンもフランス、その他諸外国に多く、好きな漫画は正式翻訳が発売されると必ず買う読者も多い。海賊版サイトの存在にも関わらず、もしくは海賊版サイト「のおかげで」フランス、その他諸外国で漫画がこれほどまでに知られるようになったと言える。法律上これら全てが問題で、サイト管理者が収益を得ることは業界にとって損害になっているが、多くの若い読者や、エンターテインメントにはまだ十分にお金を使えない若者にとっては、海賊版サイトが漫画への新しい世界への入口になっていることも否定できない。

以上から、フランスでの漫画の需要は高いという裏付けは十分にある。一方で、売り上げの面で同じ市場を争う、BD は今どうなっているだろうか？そして漫画との関係は？元フランス・アングレームにある CITEBD (Cité internationale de la bande dessinée et de l'image、アングレーム国際漫画祭の開催地でもある) のディレクター P. ルンゲレッティ (Pierre Lungheretti) は、ここ数年間はフランス語圏の BD にとって黄金時代であると断言するが、これはあくまでも作品に該当する識見で、BD を描くアーティストにとって、業界はそう甘くない (2022 年, 2017 年)。BD は黄金時代だが BD のアーティストにとっては大変な時期である。これは一見矛盾する発言だが、ルンゲレッティは BD 物語の多様化が今急激に進化していることは読者にとって歓迎される傾向であり、その多様な作品がニッチマーケットとして受容・評価されることも多い。故に評論家に高く評価されても、人気シリーズ化されたり、ヒット作品になれたりするのは残念ながら極めて稀である。この現象によって BD を描いて生計を立てられるアーティストが減少し、BD 界を諦めて分野を去るアーティストも珍しくない。

アングレームでは、1974 年から、毎年アングレーム国際漫画祭が開催されていて、コロナ禍では、2020 年 1 月は自粛期間前だったため開催された。2021 年 1 月の開催予定は延期されて 6 月に開催されると告知されていたが、2021 年 4 月時点、6 月の開催は感染リスクを考慮すれば無責任と判断され、2021 年の開催は中止となった。筆者が出席する予定だった 2022 年 1 月も開催は延期され、2022 年 3 月は再び対面で開催されるようになった。当時の日本ではまだ入国制限があったため筆者は渡欧を断念して、ニュース報道や SNS を通して開催をフォローした。

アングレーム国際漫画祭には 2000 年代に入ってから日本、そして東アジア (中国、韓国、台湾) のマンガジャンルが益々注目されるようになり、人気シリーズを描く日本人のアーティストがスピーカーとして、または受賞者として招聘されることは約束事である。2015 年、『AKIRA』の大友克洋が日本人として初めてアングレーム国際マンガ祭の最優秀賞 (Grand prix) を受賞し、2016 年

1月に開催された2015年度の授賞式に参加するために来仏した。2019年、高橋留美子は同じくグランプリを受賞した。

1974年からの受賞歴を見ると、グランプリの受賞者はフランス語圏（主にフランスとベルギー）のアーティストが大多数で、ベルギーのオランダ語圏のアーティストも稀に受賞していた。他のヨーロッパ諸国や南米、アメリカのアーティストも同じく、グランプリを受賞するのは稀である。他のアジア人は受賞したことがないにも関わらず、5年以内に日本のアーティスト2人がグランプリを受賞することは、フランスにおける日本漫画の高い評価を語る功績にもなる。アングレーム国際漫画祭には13の受賞カテゴリーがあり、これらのカテゴリーで2000年代に入ると、2001年谷口ジローが日本人で初めて受賞し（全仏キリスト協会コミック審査員賞）、その後2010年以降日本のアーティストの受賞歴が加速する中、2023年には初めて同時に3人の日本人が受賞する：諫山創：50周年記念特別賞、池上遼一と伊藤潤二：特別栄誉賞、坂口尚：遺産賞。

坂口尚は1995年に亡くなっていて、日本の視点から見ると、亡くなってから28年後の受賞は珍しいと思われるだろう。実状として、フランスではやはり日本漫画が強く求められているため、一昔前の作品が今漸くフランス語に翻訳されている。フランス語圏ではそういった「古い」マンガは新しい発見となり、爆発的な人気によって読まれて評価されていることが、賞にノミネートされ受賞につながった。受賞したことについて、坂口の大ファンで、フランスでも大人気の漫画家浦沢直樹も驚いていたと朝日新聞の記事で語る（黒田、2023）。また、坂口の作品、『石の花』（仏訳：『*Fleurs de Pierre*, 2022年、Editions Revival）では第二次世界大戦のユーゴスラビアにおけるナチスの侵略が描写されていて、フランス語圏で需要が高い歴史を表象する作品としては、全く場違いではない。出版社の「Editions Revival」=リヴァイヴアル出版は社名が案ずる通り、坂口の『あっけんベュー休』（*Ikkyu*, 2021年）を含む、他の再発見して欲しい作品を発表する。

アングレーム国際漫画祭の他、規模はさまざまだが、ヨーロッパフランス語圏ではほぼ毎週末BD関連のイベントが開催されている。コロナ禍でこのようなイベントの多くが延期・中止されたことは、楽しみにしていたBDファンにとっただけでなく、イベントに参加するアーティスト、出版社、関連グッズの販売者、そしてイベント開催者にとっても経済的な打撃になった。しかし、パンデミックのBDの販売数を見ると、BDのイベントは開催されなくなったにも関わらず、セールスは落ち込むどころか、漫画と同様に伸びていた（漫画ほどではないが）。

2. 売り続けるBDのテーマ：歴史とそのこだま

1789年から勃発したフランス革命の一部始終は日本の漫画において頻繁に描かれてきた。誰もが知る池田理代子の少女漫画、『ベルサイユのばら』（1972年、集英社）の中に主人公のオスカーは男装して戦い、夫である戦友のアンドレとともに1989年7月14日（フランス革命記念日）バステューユ牢獄襲撃で民衆側に回り、命を落とす。坂本眞一は実在したパリの処刑人の生涯に基づく『イノサン』（2013年、集英社）を描いて国内外で漫画・BD賞を受賞し、原画に関してはパリ・ルーヴル美術館で展示された（2016年）という功績も誇る。スエカネクミコが流行りの「ゾンビ」をマリーアントワネットと『ベルサイユオブザデッド』（2017年、小学館）というシリーズに登場させた。日本では漫画の中に、民衆が革命を起こし、国王と女王、その他多くの貴族が断頭された波乱万丈の歴史が一部忠実、一部フィクションの物語に化けることは今後もあるだろう。上記3つ

の作品はフランス語にも翻訳され、一部歴史的な事実からかなり離れた内容であっても、物語としての評価は高い。

そしてフランスでもまた、フランス革命が BD において鮮明に描き続けられている。歴史的に見て、革命とその後始末、100 年以上続く暴力と不安定な政治状況の詳細を BD に描いている 1 人として BD アーティストのタルディ (Jaques Tardi) がいる。2023 年に発表された「1871 年には 20 歳だった」(*20 ans en 1971*) という作品は、1871 年 5 月 27 日にパール・ラシェーズ墓地で、パリ・コミュンの戦闘員 147 人がヴェルサイユの兵士に射殺された際に生き残った 20 歳の若者の視点から描かれている。その他にも戦争、悲劇、そして虐殺を表現する BD の存在が目立つ。2023 年、世界中で反ユダヤ主義が復活しつつある中、その BD の存在が一層重要である。もう二度とこんなことが起こらないようにという思いを込めて、ホロコーストを生き残った被害者が人生の終期を迎える今、BD アーティストの力を借りてその経験と記憶はヴィジュアル文化として形になっている。「BD が大嫌い！冗談だよ」とインタビューでいうのはジネット・コリンカ (Ginette Kolinka, 1925 年生)、パリ生まれでアウッシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所を生き残った女性である。コリンカの自伝は 2019 年、2023 年に 2 冊発表され、当時の辛い過去もまた原作者の J. D. モルヴァン (JD Morvan) と数名の作画担当によって BD 化されている (Pasamonik, Valiere, 2023/10/11)。コリンカは現在 98 歳、そして 19 歳の姿が *Adieu Birkenau* (さらば、ビルケナウ、筆者訳) で鮮明に描かれる。ホロコースト (ショア) に関する BD の展示は今年もフランスで開催され、フランスの政治家の戦争犯罪の責任を問う BD も今年発表されている。

BD の研究が進む中、研究者をテーマとする BD も今年発表された。日本の学術界でも知られている社会学者のピエール・ブルデュー (1930 年～2002 年) の、当時フランスの植民地だったアルジェリア滞在を描く、250 ページの長作 BD が Steinkis 出版に 2023 年に発表された。物語は実話に基づき、ブルデューが亡くなってから 10 年後の 2012 年、政府に公開された機密軍事資料を元に作成された。ブルデューは生前、2 年間の徴兵期間に関してあまり語らず、そしてわずかに語った一部の証言は公開された資料の内容と一貫しない。その理由に関しては、本作で語られるように、ブルデューは徴兵期間中フランス政府のためにプロパガンダを作る部署に配属され、大変貢献していたということが判明した。本人は後にアルジェリアの大学で教えるようになり、徴兵期間中の活動には倫理上、問題があると考え、広く知られてはしなかったであろう (Boone, 2023)。

フランスの植民地の歴史は、他の場面でも BD で描かれている。アフリカの国の一部は元フランスの国民地であるため、現地の BD アーティストが作品をフランス語で発表することが多い。これは現地ではフランス語がまだ学校で教えられ、リングアフランカとしてまだ存在感が大きいからだけでなく、フランス語で発表する場合、アーティストの国だけではなく、フランス語圏全体でも読まれ、売られ、評価され、そして受賞される可能性もある。この傾向はフランス国内、フランス語圏全体にだけでなく、日本でもマンガ研究の専門家に注目されるようになり、2023 年 10 月 26 日から京都国際マンガミュージアムでは『アフリカマンガ展——Comics in Francophone Africa』(フランス語圏アフリカのコミックス) という展示が開催され (2024 年 2 月 18 日迄)、本展ではカメルーン、セネガル、コートジボワール、アルジェリア等のアーティストの作品が見られる。シンポジウムを含む関連イベントも数回に渡って行われる予定¹⁾である。

この波に乗って、アフリカ大陸の諸国や文化がテーマとなっている BD がフランス国内でも

続々と出ている。代表的な事例は、同時にフランスの古典文学の巨人と、BD 界の巨人を賞賛する作品である。2023 年の *Lettres d'Afrique* (アフリカからの手紙, 筆者訳, Editions Le Tripode) は詩人アルチュール・ランボー (Arthur Rimbaud, 1854 年～1891 年) がアフリカ数カ国で過ごした時期について描かれた物語で、BD アーティストのユーゴ・プラット (Hugo Pratt, 1927 年～1995 年) の名も作画担当として表紙を飾る。プラットは 1976 年『コルト・マルテーゼ』(Corto Maltese) シリーズのアルバムでアングレーム国際漫画祭で最優秀作品賞を受賞してから、長年少年 BD 雑誌『タンタン』で『コルト・マルテーゼ』を連載していた。イタリア生まれのプラットは 10 歳から母と数年間当時イタリアの植民地だったエチオピアで暮らし、第二次世界大戦の混乱の中赤十字に拾われ、イタリアに送り返された。本作が発表された 2023 年、プラットの死からすでに 28 年経っている。ランボーとプラットは、別の時代を生きていたため叶わなかった「出会い」を作品において遂げる。この「夢のような」コラボの BD は、プラットはランボーの 100 年回忌の 1991 年に、描いていた。作品はそのまま 32 年間あまり眠っていて本年度漸く形となった。フランスの元植民地の歴史が BD に描かれることは決して例外ではなく、その作品群の量、多様性は 2015 年すでに博士論文の研究にもなっている (Howell, 2015), そして今後の傾向としては、アフリカの一部の国を含むフランス語圏全体の共同制作の増加が見込まれる。

最後に、パンデミック中の 2021 年、話題になっただけではなく、数ヶ月間 BD と漫画の売り上げリストの最上位を占めていた作品をあげたいと思う。*Le Monde Sans Fin* (終わりのない世界, 筆者訳, Dargaud 出版) の中に、環境問題がテーマとなり、200 ページ弱の長編作品にも関わらず、売り上げが当時人気作品の漫画『鬼滅の刃』(2016 年～, 仏訳は 2017 年～, 吾峠呼世晴, 集英社) と地位争いになるほどだった。タイトルは皮肉で、地球の資源は無限大ではないというメッセージを痛感させる作品となっている。エンターテインメントではなく、深刻な実態を訴える BD がここまで売り上げが伸びるということは、問題の適時性を語るだけではなく、作品の質の保証にもなっていると考えられる。

3. 古典の BD シリーズの復刻版と続編

人気の古典的な BD シリーズの一部の設定もまた古典的で、古代ローマ帝国, 古代ギリシア, 古代エジプトであったりする。BD の世界において、最も代表的な作品は『アステリックス』(Asterix, 1959 年～, 2023 年現在 40 冊のアルバム) シリーズと言える。『アステリックス』シリーズは 100 ヶ国語以上に翻訳され、BD としては珍しく 3 作は 1970 年代前半、日本語にも翻訳されたがそのヴァージョンは今絶版である。

シリーズの設定は紀元前 50 年、ローマ帝国がガリア (大まかに現代のフランス) を占領した中、一つの小さな村の住民だけがまだ負けてはいない。当村のガリア人の秘密兵器はドルイド僧が作る魔法の超力ポーションで、主人公アステリックスと相棒のオーベリックス、オーベリックスの愛犬イデフィックスがシリーズの軸となる。ローマ帝国の兵士との戦い、他民族の登場人物との協力の物語はギャグ作品として描かれる。主要登場人物の名前は全てダジャレで、現代のフランス・ベルギーの政治家や著名人が作品内に風刺されることも多い。アステリックス・シリーズの初アニメ版は 1967 年に登場、その後数十回アニメ版、劇場実写版が発表されている。実写版には必ずフランスとイタリアの名優が人気のキャラクターを演じる。設定がエジプト、2002 年の『ミッション・

クレオパトラ』においてモニカ・ベリッチがクレオパトラを演じ、そして2008年の *Asterix aux Jeux Olympiques* (オリンピックでのアステリックス, 筆者訳) の中にアラン・ドロンのガイウス・ユリウス・カエサルを演じる。2022年に公開された最新の実写版の設定は中国で、新しいオーディエンスを開拓する意図が見て取れる。日本の漫画を原作とする実写映画と同様、BDの実写版アダプテーションは必ずしも評論家に映像作品として高く評価されるというわけではない。しかし、ベリッチやドロンのように、人気役者がキャスティングされることもあって、大衆エンターテインメントとして成功し、また劇場実写版が作成されることは、BD作品の人気のバロメーターと言える。2023年発表された最新のアルバム、*Asterix et l'Iris Blanc* (アステリックスと白い虹彩, 筆者訳) にはまだ、1977年と2020年の作・絵を担当した2人のアーティストの名前が残るが、小さく記された新しい名前は、新しい担当者、新しい世代のためにシリーズを受け継いだ2人の名前である。

最後の古典の続編として紹介するのは、原作がベルギーのフランダース語圏(ベルギーのオランダ語)で描かれた作品であるが、ベルギーは2ヶ国語の国であるため、人気の出版物の大多数は発表時点、すぐにフランス語、もしくはオランダ語に訳される。本シリーズもまた、「*Suske en Wiske*」(1945年～, De Standaard 出版)というオランダ語原作タイトルは、フランス語で「*Bob et Bobbette*」となっている。このシリーズはフランスよりベルギーで人気があり、原作はオランダ語でもBDとして語られている。この子供向けのシリーズはいまだに続き、2023年時点ではアルバムは407冊に上り、BD界においても例外の巨大作である。スピンオフシリーズは1950年代若干数あったが、2010年代以降出版社のStandaardは大人向けのスピンオフ数シリーズに力を入れるようになった。原作は「ベルギーのドラえもん」に例えられる子供向けシリーズの大人になった主人公は、「必要なら」人を殺害するようになってしまう。これらのスピンオフシリーズの内容に対してオーディエンスの反応は賛否両論だったが、商業的には成功し、評論家にも賞賛されていた。スピンオフシリーズの一つは、フランスで人気のFranga/Manfra(漫画スタイルの現地の作品、杉本2023, Reyns-Chikuma 2016 参照)のスタイルと異なり(日本漫画の人気の若者にあるにも関わらず)、あえてアメリカン・コミックスのスーパーヒーローの画風にこだわっている。そのため、フォーマットまでコミックスのBDより一回り小さいサイズにし、サブタイトルまでが英語となっていた。ベルギーでは隣のフランスと同じく、漫画が人気であるため、あえてコミックス・スタイルで古典的なシリーズのスピンオフを発表するのは大胆な編集方針であったが、斬新で意外性があったからこそ成功したとも考えられる。

反対に、漫画のスタイルもしくは要素を古典的なシリーズに取り入れようという試みもある。その最も有名な事例は *Spirou et Fantasio* (スピルーとファンタジオ, 筆者訳) シリーズである。*Suske en Wiske* と同様、ベルギーの作品だがこちらはワルーン語圏(フランス語)の作品である。*Suske en Wiske* より古く、1938年から続いているが、アルバムの数は2022年までに56冊が発表された。2006年、フランス語圏では2020年代ほどではなくてもすでに漫画が人気だった頃、上記でもホロコーストの生存者の物語に関わっている作家のモルヴァンとアーティストのムヌエラ(Jose Luis Munuera)が *Spirou et Fantasio a Tokyo* (スピローへファンタジオ, 東京に行く, 筆者訳, Dupuis 出版) を発表する。表紙では主人公の背景に日の丸が描かれ、2人はサムライのような着物を身に纏っている。モルヴァンは日本がとても好きで、2008年以降数年間日本に住んでいた。

2011年3月11日の東日本大震災の後、数十人のアーティストに声をかけ、200人以上に協力をしてもらい被災者を支援するために2012年 *Magnitude 9*（震度9、筆者訳）というイラスト集を発表した。日本では縮小されたヴァージョンは『マグニチュード・ゼロ』というタイトルで同年に出版され、こちらも収益は被災者に寄付され、京都国際漫画ミュージアムでは展示及び関連イベントが開催された。モルヴァンのような、比較的若い年齢でも古典的なBDシリーズに貢献できることに加え、漫画が好きでBD業界でも活躍しながら、日本のアーティストと共同制作できるような人物は今後も増えると考えられる。よきライバルである漫画の成功は刺激となり、BDの古典シリーズに新しい活気を吹き込むような存在にもなりうると言える。

最 後 に

パンデミック中、フランスを含む多くの国では自粛期間に伴い消費パターンが変化している。日本の漫画がBDマーケット・シェアに着々と迫る中、フランスの社会問題、独自の歴史に注目するBD作品、そして古典的なBDシリーズの続編やスピンオフは漫画にはあまり描かれないような物語を読者に提供し、「安全」で確実な作戦に思われる。社会問題の表象はメディアにも注目され、評論家にもピックアップされるため、主に「ただの」エンターテインメントである漫画との差別化が可能となる。フランスで翻訳・出版される日本の漫画作品の中にも当然ただのエンターテインメントという領域を超える作品はあるが、日本と同様、一番売れる、そしてとりわけ若者の間で売れるジャンルは専ら少年・少女・青年漫画の仏訳である。「ただのエンターテインメント」は決して見下されるジャンルではなく、それなりの居場所があって、そして上記で述べたように、現地のBDマーケットシェアへの脅迫と見なされることは少なくない。日本の漫画業界の物語作り、その成功の秘密は漫画家・編集者（出版社）・読者（のアンケートデータ）という三角関係であって、読者はエンターテインメントとして何を求めるのかを把握しているからこそ、フランスに限らず、その他の諸外国にも日本漫画は現地のマンガ媒体のマーケットシェアへの脅迫となっている。漫画の物語性と商業性は切っても切れない関係で、若い読者がいる国では今後もその人気上昇すると考えられる。日本漫画の勢いを脅迫としてではなく、挑戦として捉えれば現地の作品をより面白く、刺激的に描くことによって、フランス語圏でしか描けないような優秀な作品は今後も生まれてくるだろう。

注

- 1) <https://kyotomm.jp/ee/africamanga/> 参照（最終閲覧日 2023/10/30）

参考文献

- 杉本パウエンス・ジェシカ 2023年「『日本マンガブーム』以降のフランス語圏におけるバンド・デシネ界と女性」『国際文化研究』27号, pp.89-97.
- 黒田健郎 2023年4月22日「『うっそだろ』浦沢直樹が驚く「石の花」 一人で描いた孤高の漫画家」『朝日DIGITAL』<https://www.asahi.com/articles/ASR4L64BDR3WUCVL05D.html>（最終閲覧日 2023/10/31）
- Boone, Damien. 2023/10/23. “Bourdieu, une enquête algérienne – Par Pascal Génot et Olivier Thomas – Ed. Steinkis.” In: *ActuaBD.com* <https://www.actuabd.com/Bourdieu-une-enquete-algerienne-Par-Pascal-Genot-Oliver-Thomas-Ed-Steinkis>（最終閲覧日 2023/10/29）
- Gfk Press Detail. 2023. “85 millions de BD & Mangas vendus en 2022.” <https://www.gfk.com/fr/press/85-millions-bd-manga-vendus-en-france-2022>（最終閲覧日 2023/10/31）

- Howell, Jennifer. 2015. *The Algerian War in French-Language Comics, Postcolonial Memory, History, and Subjectivity*. Lexington Books.
- Leboucher, Clémence. 2022/05/04. “Depuis janvier, le piratage en forte augmentation.” In: Actualité, Les univers du livre. <https://actualitte.com/article/105864/technologie/manga-depuis-janvier-le-piratage-en-forte-augmentation> (最終閲覧日 2023/10/31)
- Lorey, Thierry; Mughal, Mazhar; Javed, Rashid (2022) “Pandemic buying: Covid-19 and purchasing behaviour of French households.” In: *Leibniz Information Centre for Economics*. Keil, Hamburg.
- Lungheretti, Pierre. 2022 “Le nouvel âge d’or de la bande dessinée”. In: *L’ENA HORSE LES MURS* 2022/02, no.512, pp.64-67.
- . 2017/10/25 “‘La bande dessinée connaît en France un nouvel âge d’or’, pas ces auteurs”. In. *Le Monde*. np
- Nicolai, Messaline; Grange, Camille. 2020. “The Digital Transformation of Retail During the Covid-19 Pandemic: A Comparative Study in Canada, China, And France.” In: Ebrahim Mazaheri (ed.) *The Impact of Covid-19 on E-Commerce*. Proudpen. np. <https://www.proudpen.com/book/the-impact-of-covid-19-on-e-commerce/the-digital-transformation-of-retail-during-the-covid-19-pandemic-a-comparative-study-in-canada-china-and-france/> (最終閲覧日 2023/10/31)
- Pasamonik, Didier; Valiere, Marguerite. 2023/10/11. “Ginette Kolinka : “Je déteste la bande dessinée! (Je rigole) [VIDEO]””. In: *ActuaBD.com* <https://www.actuabd.com/Ginette-Kolinka-Je-deteste-la-bande-dessinee-Je-rigole-VIDEO> (最終閲覧日 2023/10/31)
- Pass Culture. 2022. *Études, Le livre sur le pass Culture: Tour d’horizon des pratiques des jeunes*. Normandie Livre et Lecture.
- Reyns-Chikuma, Chris. 2016. “Introduction: Manga, Manfra, Nouvelle Manga, Nouvelle BD, etc.” In: *Alternative Francophone* vol.1, 10, University of Alberta, pp.1-7.